



オオキンケイギク

149 編も、ハレルヤ (神をほめたたえよ) に始まり、ハレルヤで終わる詩篇です。

まず、ハレルヤ。新しい歌を主に向かって歌え。(1a) という命令がなされていますが、新しい歌というキーワードが出てきます。詩編は 150 編もありますが、新しい歌をもって賛美したいと願ったのはダビデ(40、140 編)と神殿の詠唱者ら(33、96、98、149 編)です。新しさを求める姿勢があります。

詠唱者らは個人的な祈りではなく、「主に従う人よ」とか「諸国の民よ」と呼びかけ、共に賛美するように勧めています。彼らは、共同体全体の礼拝という意識で賛美しています。その内容は「神への賛美と主の待望とその日の裁きを受け入れる」という、他の 2 編の新しい歌と同じ流れになっています。

とくに 149 編は 主の慈しみに生きる人の集いで賛美の歌をうたえ。(1b) と、はっきり、集い という集会、礼拝を示す言葉が用いられています。この礼拝に集う人々は 主の慈しみに生きる人 であり、イスラエル/シオンの子ら と呼ばれるのです。

礼拝は その造り主によって喜び祝い/その王によって喜び躍れ。(2) と、喜びの祝い、祝祭だと詩人は言います。その賛美は 踊りをささげて御名を賛美し/太鼓や堅琴を奏でてほめ歌をうたえ。(3) とあるように、踊り や楽器を伴った ほめ歌 で、華やかな、賑わいのある形なのです。私たちはクリスマスなどに賛美礼拝をささげます。また、多くのゴスペルによる礼拝も行われていることを知っていますが、これらはまだ、旧約の民に比べたら、小規模かもしれません。

ここに集まった人々は 主は御自分の民を喜び/貧しい人を救いの輝きで装われる。(4) 主の慈しみに生きる人は栄光に輝き、喜び勇み/伏していても喜びの声をあげる。(5) という、神の大きな愛に包まれ、貧しい人 が救われると特筆しています。そして、神の 栄光 に浴して、伏していても と特筆し、立ち上がれないような人でも、生きる喜びと力を受けると感謝しています。

続いて、ここに集まった人々は 口には神をあがめる歌があり/手には両刃の剣を持つ。(6) と、賛歌だけではなく、両刃の剣 を手にしていると言います。両刃の剣 と、聞くと、私たちは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。(ヘブル 4:12) の箇所、即ち、強く、鋭く、そして恐るべきものは 両刃の剣 よりも「神の言葉」であると知らされます。神の言葉の前ではすべてが明らかにされるのです。従って、神に逆らう人間の罪が現れ、裁かれるのです。国々に報復し/諸国の民を懲らしめ/王たちを鎖につなぎ/君侯に鉄の枷をはめ/定められた裁きをする。(7-9a) と、暴虐な権力者に勝利する日が必ず来ることを喜びながら待っています。これは、主の慈しみに生きる人の光栄。ハレルヤ。(9b) と、裁きそのものが、主の慈しみであるとの信仰を告白しているのです。

『讃美歌 21』は 572「主をあがめよ」 https://www.youtube.com/watch?v=AlW-L_L8vhY を挙げています。チャールズ・ウエスレイの堂々たる詩にメサイヤの作曲家ハイドンが曲を付けたものです。

ジュネーブ詩編歌はリコーダーの重奏による爽やかで、軽やかな賛歌です。

<https://www.youtube.com/watch?v=ZdiplsraSt4&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=149>